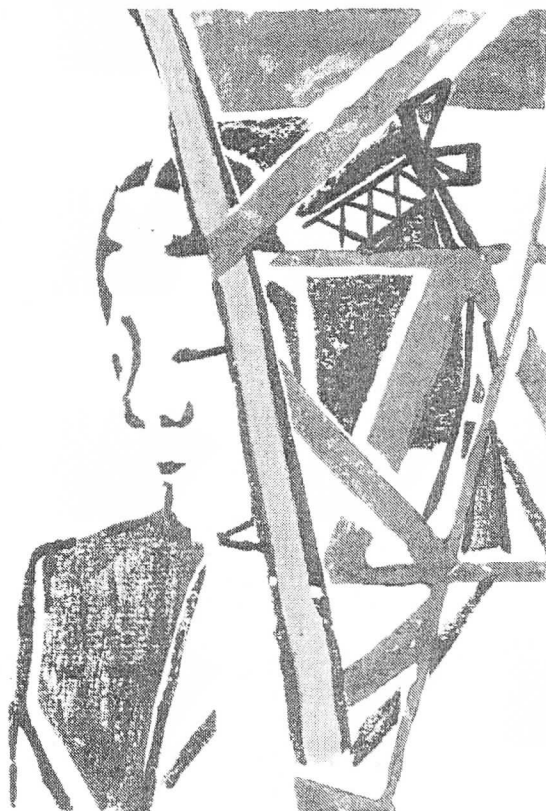


うとう

協和うとう会三〇周年記念誌



うとう



協和うとう会 20 周年記念誌

◆ 表紙 題字・加藤辨三郎氏（協和醗酵会長） カット・高橋孝夫氏（うとう会会員）

◆ もくじ

協和うとう会 20 周年を祝して・協和醗酵工業(株)会長 加藤辨三郎	2
うとう会のあゆみ・協和うとう会会長 新井純	3
座談会・その一 息長く、さらに発展へ励もう	4
うとう会と私の師 ― 命尾静子先生・望月美江	6
座談会・その二 次の 20 年の発展を担って	10
協和うとう会 ― 20 年の足跡・水原一瓢	14
会員名簿	56
第 20 回協和うとう会番組	(巻末)



協和とう会

二〇周年を祝して

協和醗酵工業(株)会長 加藤辨三郎

正直のところ驚いた。はやくも協和とう会が創立二〇周年を迎えようとは。いや、早いばかりではない。任意に発想され、完全に自主運営され、しかも二〇年続き、それほどか年々歳歳人員的にも質的にも向上している同好会は、少なくとも当社にはほかにない。

それは、新井会長をはじめ、世話人諸氏の熱意と努力に負うところ最も大であるが、同時に、会員諸君の深い理解と趣味の豊かさによること、いうまでもない。私は、諸君のたゆみなき精進に対し心から敬意を表する。

たしか二年くらい前になろうか、本社でうたいの会が開かれたことがある。その時、私は家内と共に拝聴した。二人とも、諸君のうたいのすばらしさに舌を巻いてしまった。水原君その他リーダー格の人は、本職に少しも劣るところはないと思った。

また、別の機会に、私は、新井会長の仕舞を拝見したことがある。その時も、あの理論家にして、この芸あるとはと、ほとほと感心したものだ。今でも眼に見えるようである。

実は、私も、若い頃、数年稽古したことがある。仕舞も

二、三番は習った。それにも拘らず、肝心の「うとう会」には、全く失礼してしまい申し訳ない。ただ、理解だけは十分持っているつもりである。だから、うとう会が二〇周年を迎えたことはもちろん嬉しいが、それとともに、その実力の充実していることを、一層喜ぶものである。

しかも、その二〇周年記念会を、清風クラブで開いてくれるとは、なんと有難いことか。諸君もご承知であろうがあの場所こそ、協和醗酵発祥の地なのである。さればこそ会社創立三〇周年の記念事業の一つとして、そこに清風クラブを建立したのである。そのめでたい場所で、うとう会の二〇周年記念会を開いてくれるのだ。これを喜ばないでいられようか。私も、他に緊急用件の発生しない限り必ず参上して喜びを共にしたい。

そして、私は、うとう会が今後ますます盛んになることを願ってやまない。ことに、私は、友愛会々員もふるってこの会に参加せらんことをおすすめしたい。諸君の長寿と健康を願うことでもあるが、同時に、この会は最もよい親睦機関であるからである。最後に、協和醗酵と共にこのうとう会の発展を、重ねて願って祝辞とする。



うとう会のあゆみ

協和うとう会会長 新井 純

昭和三十五年七月十七日、本社、東研、富士観宝合同謡会が熱海荘で開催されました。

観世六名、宝生十五名。

前日夕刻集合して、食事もそこそこに、翌日の本番にそなえ、夜半まで稽古に励みました。怪盗に、あり金を残らず持ち去られるのも知らず、大小鼓の調子合わせに夢中になっていたのは、忘れられない思い出です。

第二回は修善寺のあさば旅館の舞台を借りました。この時から「うとう会」と称することになりました。本社に磯部さん、東研に水原さん、富士に高橋さんという玄人以上の、しかも熱心この上ない方達があってこそ、うとう会が芽を吹いたのです。

それよりほとんど毎年、熱海荘で続けられました。

熱海つるや旅館での第六回には、勧誘のかいあって、初めて、四日市工場より大勢の参加があり、また、東京よりご夫人方も来演され、四十名と賑やかでした。

第七回は四日市の皆さんのお骨折りで、四日市倉庫さんの寮をお借りしました。堺工場よりの参加も得られました。それより数回は、網代、三島、浜松と静岡県下で催されましたが、人数の増加に応ずるため、土曜日午後と、日曜日

早朝より夕方までの二日間にあたる会になったのは第十二回からです。昭和四十八年九月でしたが、私は少し調子が悪くて休みました。

第十三、十四回も続けて私は休みました。まことに相すまぬことと思っています。

実はその第十四回が大阪で開かれ、防府・門司・宇部の参加あり、八十名を超える、名実ともに全国大会となったのです。

その後、湯の山、三井寺、湯の山、竜野、袋井と十一月はじめの土、日曜のうとう会が百名になんなんとする盛大さで続いております。

安島幹事らの尽力で、会社からの御後援も得られて、参加がしやすくなりました。

幹事の皆さんのお世話は大変です。会場、宿所の手配、番組の編成、食事の心配などなど、感謝のきわみです。

本当に有難うございます。

今年は第二十回を迎えます。長かった様にもあり、また、もうそんなに！とも感じます。いつまでも「うとう会」が続き、平素遠くにいるお互いの交驩こうかんをたすけ、また、OBと現役との懐しい再会の機となることを念じております。

協和うとう会第20回記念座談会・その一

息長く、さらに発展へ励もう

協和の謡の歴史を築いた立場から

協和うとう会——「うとう」は、「謡う」であり「打とう」であり、曲名「善知鳥」にもかかっている。年一回の会を重ねて今年は第20回。社内の同好の士による全くの自主運営で二十年。今では協和醗酵はもとより、広く協和関係者の修業の成果発表の場として、また親睦・融和の集いとして大きな会合となっている。この「協和うとう会」の産婆役・育て役をつとめてこられた方々、そしてこの会を次の世代にも発展させていく方々に、それぞれの立場で大いに語っていただいた。△第19回協和うとう会（五十五年十一月・静岡県袋井市・秋葉本殿可睡斎）で収録▽

第一回は35年、熱海荘で

司会 いつもですとあすのために地合せや、音合せでにぎやかな夕食後のひと時ですが、本日は、うとう会誕生のころのお話をうかがいたいと思います、いうなればうとう会の産婆役、育ての親、そして協和醗酵の謡の歴史をつくってこられた方々にお集まりいただきました。

新井会長、さっそくですがうとう会の発足は何年でしたのでしょうか。

新井 来年は第二十回になるんですが実は二〇周年ではないんです。第一回は昭和三十五年七月十七日に熱海荘で開きましたから、満二十年は今年になるんだが、間がぬけたので第二十回が来年になるんです。
最初はうとう会という名前はなく

て、親宝合同ということで、水原一瓢さんと高橋孝夫さんらが企んだことだと思えますよ。

私は、三十四年に防府工場から本社に転勤になり製造部長をしておりましたが、三十五年七月初めに日本酒類との合併問題で大阪を経て九州鹿児島まで出張したことがあるんです。その帰りに熱海に途中下車して参加したんです。これは日記に書いてあることだからまちがいありません。（笑）

富士は宝生の天下のころ

司会 そのころの各事業場の謡の活動状況はいかがでしたか。

高橋 私は富士工場におりまして女のお弟子さんを十数人と男のお弟子さん一人二人をかかえて宝生の天

出席者（発言順）

新井 純	（本社・観世）
磯部武夫	（元大阪支社・観世）
高橋孝夫	（元富士工場・宝生）
西村 淳	（本社・観世）
富岡啓太郎	（東京支社・観世）
水原一瓢	（元本社・宝生）
司会	
安島 将	（本社・観世）
まとも	
浅井 勝	（富士工場・観世）

下でした。観世は大坪さんお一人だったと思いますよ。

そんなころあの悪名高き箱根会談があったんです。一瓢さんと磯部さんといっしょになって、夕方謡をやるうとう会のことになって、水原さんが太鼓、磯部さんが鼓を打って、私に鶴亀をうたえというんでうたたんです。ところが、お前のうたいじゃあ太鼓も打てない、鼓も打てないといわれましてね。私は一念発起して……そんなことがきっかけでこのうとう会がはじまったのです。（磯部「あれは組合大会だったと思います」）



「……と日記に書いてある」(新井)。左から
新井会長・磯部さん・高橋さん

水原 研究所では、阿部主任研究員、板垣君、蛟ちゃんもおったかな、五人ぐらいでやっておりました。古い人はご存知だと思いますが昭和三十三年、丹沢で三十メートル落ちて三十五年ごろといったらまだ足がおかしかったころです。

「観・宝合同でやろう」

司会 宝生の盛んな富士にあつて、

司会 新井さん、本社の状況は？

新井 本社には何もありません。

私も転勤早々でしたから。防府は盛んでしたよ。男女あわせて二十数人はいましたね。

富岡さん観世はどうでしたか。

富岡

西村さんと二十六年に富士工場に入社したころは、高橋門下の宝生が大勢いましたね。観世は西村さんと二人でした。私もはすぐ転勤で防府にいき、私は二十九年に富士にもどり、三十二年に大坪さんが、

西村さんも防府からもどられて、観世が三人になった。そのころ磯部さんが大阪から出張でこられて、水明荘で話したことがあるんです。大西師の会で初めてシテを舞った磯部さんが、太夫の気持だなどと話されてね。水原さんの話も出て、それじゃ観宝合同でやろうよということになって、三十三年にやったことがあるんです。ですから第一回の予備会的な会合がその前にあったんですね。

司会 新井さんはさきほど、本社には何もなかったといわれましたがそのころ磯部さんは本社にいらっしやったのですか。

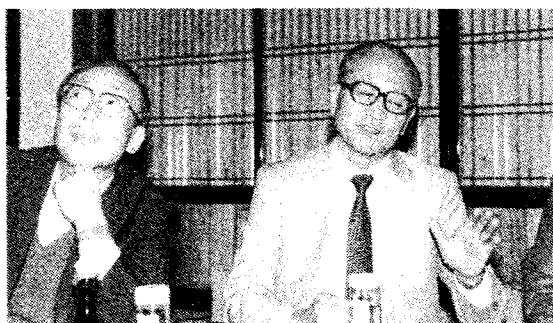
磯部 同じくらいでしょう。

新井 何年に本社にこられました。

磯部 三十四年十月でした。

新井 それなら僕の方が少し早いね。

磯部 そのころ堺はずいぶん盛んだったんです。当時、松田さん、本山さん、星野さんなんかいて、大



「丹沢で30メートル落ちて……」(水原)。
左から富岡さん・水原さん

阪から、長沢常務、前埜課長、亡くなった岡崎課長、私と四人でよく堺にうたいに行ったことがありました。そんな堺の雰囲気をもつ我々が西方の代表として関東の方々と、ワサワサとやって今のような話につながったんです。

盗難のおまけつき

司会 で、いよいよ第一回のうとう会の発足となるのですが、幹事役などは？

水原 私のところに昔の番組から經理の伝票まで全部あるんですが、十五回ぐらいまでは東京と大阪の真

中でということ富士の高橋さんが、宿の世話から会計の世話をされ、私が番組の作成、写真の撮影などやっておりました。

当時の写真は、たいへんいていいですね。全部各事業場にまわして希望をとって、正の字を書いて、焼増しましたんです。しかし、それもくたびれちゃいましてね。その後は写っている人だけパツパツと焼いて送るようになりました。これが十二回ぐらいからだと思っています。

磯部 初回は、ちょうど熱海荘が協和醗酵のものになった年なんで、どこでやろうかといったときに、熱海荘を初めて使おうじゃないかとなったわけです。

司会 そうしますと第一回の構成は、富士、本社、東研の三事業場だったのですか。

高橋 そうです。

司会 案内状などは……。

高橋 謄写刷りでした。私はそれを十年ぐらいやりましたよ。

西村 防府がテープ参加しませんでしたか。

高橋 あれは、二回目ぐらいだったと思いますよ。

司会 何人ぐらいの参加だったのでしょうか？

富岡 んー、観世が新井さん、西村さんと大坪さん磯部さんと私の五人かな。宝生が高橋さん、水原さんと……当日参加の富士の女性といった構成で……。

高橋 富士の当日参加を加えると二十人ぐらいいたかなあ。

磯部 お茶の人も来てくれたなあ。

西村 二十人もいたかなあ。

司会 多い方がいいんで記録には二十人としておきましょう。(笑)

ところで、今のようでなく、少人数でしかも謡の虫が集まったのですから、会の運営などは、そう苦労もなかったと思うのですが……。

高橋 そう、特にはありませんね。

西村 それは盗難防止ですよ(笑)

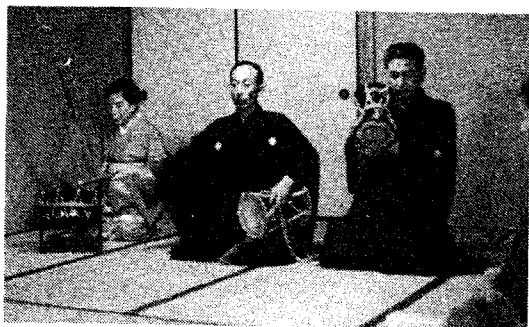
高橋 それは、あとからいわれたことで、何も最初から盗まれることなんか考えてもいませんでしたからね。

盗難事件の、一部始終

司会 第一回の時に盗難があったのですか。(一同で一回目だ、いやその前だ、と話が混乱、記録不能)

高橋 これだけ年月がたつと記憶もあやしくなるなあ。

新井 あやしくないの「三十五年七月十六日熱海荘に泊る、カッコ盗



熱海荘での第5回うとう会で(40年)
左から命尾先生・富岡さん・高橋さん・筆者

うとう会と私の師

——命尾静子先生

望月美江

命尾先生が、きびしい能の世界宝生流六百年の伝統を破って、女性で初めて道成寺を舞われたのは昭和二十七年の春と思いました。江戸時代徳川家に仕えた名門、宝生流命尾家を継いで欲しいと申し入れられ、その襲名披露の能でございました。大変な大事業だったと思います。

当時先生は三島の自宅はもちろん、東京、藤沢、熱海とけい古をしておられたそうですが、そのころから二、三年後だったでしょうか、高橋様や、富岡様が、小鼓や大鼓のけい古にいらして協和醗酵とのご縁になり、またまたそのあとの方から私も弟子入させていただきました。

「能は精神で舞うもの、修業をしてひたすらに自分の芸をみがくだけ、舞は孤独なものです。」と先生はいっておられました。

それからあと、昭和三十何年だったでしょう、熱海荘で第一回うとう会が生れたのは。

お忙しい先生も、その会ごとに応援してくださいました。謡の地頭、舞の地謡、太鼓も打ち、一調もされ、番外で美しい舞も舞ってくださいました。

修羅物などのけい古は、背の高い立派なお姿で一本の扇が右手にあれば太刀になり、左手に構えれば強靱な弓となります。「腰に力を入れて」と口ぐせにいわれました。

「左足を少し引き、右足を一步引き、左足を引き揃える。」この一つの型のヒラキさえ、未だに苦労の種として勉強している私です。

当時は火曜日がけい古日でした。会社の忙しい時、残業につぐ残業でキリキリ舞をした日でも先生のお宅の門をくぐり、庭の池の端にかけられた石橋を渡る時、鼓の音や、気合のこもった先生の掛声が聞えますとパッと現実から別世界にとび込んだように思われました。新年会、温習会、うとう会、そして、忘年会と一年中、皆忙しい忙しいといひながら公私共に励みました。

いろんな失敗も重ねながら、女性の部員も多く、謡熱心な高橋先生に手をとられ、一步一步歩けるようにみんなで努力したあのころをほんとうに懐しく思い出します。

難さわざ、十七日、合同うたい会二十人盛況」とこの日記に書いてあるからまちがいないの。(笑)

磯部 新井さんが出張の帰り、大金の方はトランクの下に入れておられたので無事だったが、小銭はちゃんと盗まれた。

司会 盗難事件の話は初めて聞く方もあると思いますので、その顛末を正確にお話しできる自信のある方……。

磯部 あと始末までやったので私から……。

熱海荘の一階の小部屋にみんなの荷物、洋服をいっさい置いて、夕食のあと二階で地合せをわんわんやっている間にやられたらしい。気がついたらみんな洋服のサイフがないんだ。

西村 例外二人あり。(場外から二人はもともと持っていなかったの聲、大笑)

磯部 熱海荘は当時、熱海の酒屋さんのもので従業員も向こうの人だったんです。これは大変ということ警察に届けたんです。そしたら翌日、中身をぬかれたサイフがゴミ箱に捨ててあったので、これは専門家だということになったんです。が、われわれ帰る金がない。新井さんが

たまたま出張の帰りで大金は難を免れたので、そのお金を拝借して帰ったわけです。

で、私は仕事柄、当時の人事部長幾度さんに、これこれこうだと報告したんですわ。幾度さんも笑っておられたけど、まあ熱海荘もまだ借りたばかりで規程もなく、金庫も用意していなかった、会社の管理も悪かったことやから弁償してやる、申告せいということ、あつたかなかつたか知らんけど申告して(笑)、それから熱海荘に金庫を据えつけて自主管理せいということになったんです。

(場外「総額いくらでした」「それをきいてはいけません」笑)

水原 補足、あれは寮とか保養所の専門家だったようですね。その後つかまったと聞きましたよ。

富岡 もう一つ補足、あの日は来宮神社の祭礼で、全国の腕ききが集まってたんだそうです。

新井会長 が誕生

司会 ところで西村さん、これまでの参加の中で印象に残っていることは？

西村 それは盗難事件のとき、なぜ私は金をとられなかったかという

そして会社も成長期にあり、その発展と共にとうとう会も、だんだん大きく成長してゆきました。

家事都合により私は退社して三島を離れ住み十年余り、その間健康を害したり、もろもろのことで七、八年けい古を休んでおりましたが、先生との縁は大切に育てて参りました。

けい古を始めて久々に、五十年の大阪のとうう会に参加させていただき、その盛会にまず驚き、感激はひとしおでした。健康も回復し、それからは毎年先生の指示を仰ぎ、演目も決めております。

すでにOBの今、何時までも変りない皆様のお誘いに毎年参加させていただいておりますことを心より有難く光栄に思っております。昔の懐かしいお顔ぶれ、また次々と参加される大勢の若手の皆様、年ごとに立派な成果を拝聴し、拝見し、すばらしい勉強の場所となっております。このとうう会には私にとりましては一年の大きな目標であり生きがいでもあります。

今年は、はからずも、とうう会の前に三島神社の行事、「木犀の夕」の奉納舞をお受けしお年を召した先生にいろいろ指導をいただきました。さて、その九月三日は先生のご縁故により、お笛の藤田大五郎師のご来島を得、本番前の打合せの時、藤田先生のお笛に対し拍子盤に向われた先生は八十歳とは思えず、近ごろ丸くなられた背もピシッと伸びて、例の気合のこもった掛声と共にパンパンと拍子を打たれるすさまじさは周囲の人々に息つくひまも与えず、それは見事な一騎打でした。

日ごろはさすがにお年に勝てず弱々しくなりましたが、拍子盤に向われると芸の化身になってしまうのでしょうか？

十一月二日(第十九回)のとうう会が終わったあと先生に報告の電話をしましたら、

「無事に済んでおめでとうございます。さあまた来年ですね、私が生きておりましたら、何かいろいろ考えましようね」とのお言葉。

先生のお年を氣遣うようになったこのごろ、何とも淋しく、ただただご健康と長寿をひたすら希っております。

(昭和五十五年十一月記)

ことです。

あれわね、ズボンをつるす時、逆さにするでしょ、するとサイフが重いのとびだしますね、それを見てこれは危ないと思ったんで姫鏡台の中に入れておいたんです。とられなかったのは水原さんと私だけだった。あとはみな油断があるね。(笑)

それと、四十九年から五十年にかけて病気になる五十二年の三井寺のうとう会から再開したんです。あの時は、熊野のシテをやらせていただきました。久方ぶりの再開だったのと思い出深いですね。

司会 新井会長が印象に残ったことを一つ……

新井 そうね、もともととうとう会には会長ってのはなかったんですよ。私とその会長を押しつけられたのは何回目かうとう会か忘れましたが、三島の佐野別邸でやった帰り、ソバ屋の二階で飲んだことがある。その時にうとう会というからには会長ぐらい置かなけりゃいかんということ、新井が一番古いのでやらせようと、私が宝生から観世に引っぱりこんだ中川年男さんに押しつけられた。これが一番印象に残ってるね。

僕は好きな者が集まっているんで幹事は必要だが、会長なんて必要な

いと思うんですが、ま、名誉会長ということになっておりますので、そのおつもりで……。

あさば旅館の思い出

司会 いえいえ、会長は名誉会長とおっしゃってられますが、正式に会長で、名誉ではないのでつけ加えておきます。

水原 水原さんはいかがでしょう。

水原 何回目か私の記憶は頼りないですが、修善寺のあさば旅館で富岡さんが池を隔てた能舞台で薙刀をもって勇壮な舞を舞ったことですね。

もう一つは、富士工場の近くの老人ホームで命尾先生に指導していただいたながら初めて胡蝶の番囃子をやったことが二番目。

三つ目は、大阪の豊津で中学校の先生をやめられた観世の先生が自分の家に舞台をおつくりになつていてのを借りたことがありましたね。あの時赤いのを被り狸々の袴能をやったことが記憶に残っています。

磯部 私もやはり修善寺のあさば旅館の思い出ですね。池の向こうに能の本舞台があるんですね。そこをね、高橋さんに借りろ借りろといつて一日借りてやったことですね。

司会 その時は何人ぐらいの参加

だったのですか。

磯部 少なかったですよ。

富岡 観世では、新井、西村、磯部、大坪、私と、宝生は高橋門下と水原さんだったから十五、六人だったかな。

あのあさば旅館の思い出は、大協和への転勤の話で磯部さんから聞いていたので、富士での最後の思い出にと、修善寺の野田旅館のご主人から薙刀を借りて舞って、そして大協和へ転勤したんです。

司会 十何回かまで事務局をやられた高橋さんはいかがですか。

高橋 それは毎年毎年、中心地は私のところなんで、熱海、三島のお寺、あさば旅館と私が富士におります間は、富士工場が設営せにやいかんと一生懸命でした。今思うと地理的にも会場にも恵まれていたと思います。

今日のこの可睡齋も命尾先生の謡の会で昭和三十何年かに一度使わしていただいたことがあって、岡田君に当ってみたらと持ちかけてみたんです。

奥山の半僧坊は私自身があそこはいいんじゃないかと当ってみたら本当にいいところだった。ただ食いものがお粗末だった。(笑)

息長く続けよう

司会 長い間、ご苦労様でした。ところでこれからのうとう会をどう発展させていきたいか、お一人ずつお願いします。

新井 そうですね、むずかしいことですが、年に一度、何人かの人が集まっていっしょに楽しむ、これがいいですよ。息長く続けてほしいですね。

若い人にお勧めして、ロートルは消えてゆくことですし、消えていつてしまつてはなくなつてしまふ。若い人に引きついでもらいたいと祈念します。

磯部 まったくその通りでね。私も前もって考えてきたことは、今、新井会長がおっしゃったことと結論的にはいっしょで、長く続けていたきたい。単なるお祭りでなく、謡の効用の一つである趣味を通じてのお互いの交流がこの場ではかられる。これからは老人社会になるんでOBもふえていくんだから、OBとの交流をはかる上でも、ぜひ新人を開発して下さいといいたい、それにつきます。

狂言なども加えて……

高橋 私はね、かつて富士は宝生の
の大国だったんです。ところが今は
さびれましてね。これをなんとか回
復したい。まあそれよりも、謡の心
は、観世、宝生を問わず喜多流でも
同じなのですから、四日市あたりで
盛んだと聞いております喜多流など
にも声をかけてみたらどうでしょう
それとも一つ、狂言というと私
どもは面白いと思いますが自分でや
るとなるとなかなかやりにくいも



「私は油断しなかった」(西村)。左から磯部さん・
高橋さん・西村さん

です。ところが、案外盛んな世界が
あるように聞いています。狂言なん
かに興味をもっている方々にも入っ
ていただけたらと思います。

そして協和のうとう会は、謡、狂
言、囃子、仕舞と謡だけでなく盛ん
にしていきたいと思っています。

西村 世阿弥は本説を正すといっ
た。本説とはいふなれば、平家物語、
源氏物語、伊勢物語などで、こうし
たバックグラウンドをもっと勉強して
もいいのじゃないか。うとう会の午
前中に源氏物語講釈とか、伊勢物語
講釈をきくといったことがあっても
いいのではなからうかと思っています。

水原 前にもいったことがあります
ですが、謡は世阿弥が始めて以来、全
部拍子にのっているということです
ね。ところが明治以前までは殿様や
町方がスポンサーであつたんです
だんだんスポンサーがアマになって
から拍子のことをあまり強くいわな
くなっちゃった。それで、素謡を発
明した。しかしもとは、拍子に
合う音楽だったんですね。ですから
どうせお遊びでやるんなら、いっ
ちやうどたるかと考えていいように思
うんです。で、私は拍子のことを、
うるさくいうもんですから宝生の評
判が悪いんです。しかし素人は袴能

までやっていいんですから、なんと
かうとう会では袴能まで出していき
たい、努力したいと思っています。

一度やめても必ず戻れ

司会 最後にありますが、後に続
く若い人達に望むことを一言ずつ……

水原 謡は一度やめても必ずもど
る、と前に話したことがあります
前にやっていった人をどんどん引っぱ
り込んでください。

富岡 うとう会では、やたらと難
かしい曲を出さずに、もっとポピュ
ラーなものでいいんです。その表現
の仕方をよく練習してやってみる。
そうすればもっと多くの人が参加で
きると思います。

もう一つ謡をはじめたからには、
地拍子を習ったらしい、舞もやって
みたらしいし、できれば囃子もやっ
たらいい。そうすれば、面白さ、興
味が倍増するように思います。機会
があつたらぜひこの分野にも目を向
けてほしいと思います。

西村 私の主張はただ一言、歴史
と文学を知ろう、この一点です。

高橋 私の経験から、このうとう
会をずっと続けていくためには、や
はり素謡だけでなく舞も囃子も続け
ていきたいと思っています。そうするこ

とによって謡と囃子の関係を自然と
会得してくるものなんです。

天狗 になるもよし……

磯部 私は二つある。一つは、お
やめになつてはいけませんよ。稽古
していかないからうとう会に行かない
よというのではなく、うとう会だか
ら行くか、となつてほしい。

それからもう一つは、私は謡が下
手だからと謙遜していらっしゃる方
がいますが、謡が上手になりたけれ
ば謙遜してはいけません。天狗にな
りたいといいたい。天狗になつてい
るうちに天狗の鼻を押し折られる時
がある。その時にもう一つ上手にな
る。それと、上手な人の謡を聞くこ
と。うたい方がわかると耳がこえて
くる。そしてあの人のまね、この人
のまねをしてみることです上達するも
んなんです。天狗の鼻を押し折るの
は我々は上手ですから、大きな声で
うたってください。

新井 お互に興味を同じくする者
が、どうぞ仲よく末永く、ごいっし
よに。私もやれるかぎりやります。
これも一つのご縁ですから、いつま
でもくじけることなく、これを祈念
しております。

司会 ありがとうございます。

次の二十年の発展を担って

若手世話役の立場から

初舞台の思い出など

司会 さきほどまでは、うとう会の二十年の歴史をふりかえる座談会をお聞きしていましたが、この座談会では、日ごろ各事業場で謡のお世話をいただいている若手の方々を指名させていただきました。そしてこれからの二十年を担うみなさん方に「うとう会」や謡曲に対する忌憚のないご意見をおききしようというわけです。

まず、うとう会に最初に参加したころの思い出などからおうかがいしましょう。

田辺 私の初舞台は、四日市工場当時で五十二年の希望荘の時でした。謡は、その前年に富岡さん（現土浦工場長）から強引に勧誘されてはじめました。最初は、本の記号もなんにもわからないときに、熊沢先生の前で、とにかく俺の真似をせいとま

るっきり口うつしで、固くなって声を出したのを覚えています。ただ、希望荘での初舞台はなにをやったかわえていません。

司会 先ほどの先輩たちの話を聞くにつけ、古い人ほど古いことをよく覚えていられるもので若い人は、ほんの数年前のことも覚えていない。（笑）

小山 私が最初に参加したのは、四十九年の館山寺だったと思います。入部のきっかけというのは、入社したときに富士工場と東研を見学したので、その時東研の研友会の副会長をやっていたのが奈良さんでして、いろいろとクラブ紹介をしてくれたとき謡曲部の紹介がありました。その時、私も馬鹿なことを聞かなければよかったんですが、「何流ですか」と聞いたのが悪かったです。それと同期入社の人がちょうど森さんの部屋でして、しばしば昼休

みに森さんの室に行くので、ちょっとついて練習を見にいったのが入部と認められてしまいました、あれよあれよというまにここまでできてしまいました。

野次馬で謡も鼓も……

長倉 私が始めたのは、小山さんより二年前です。三島の玉沢でやった時が最初です。

なんとなく野次馬で首を出して始めたのがきっかけです。玉沢では橋弁慶の子方でした。それから二、三年たってから、鼓でもと……謡も鼓も一向に上達しなくて、ただなんとなく続けています。

司会 私も長倉さんとだいたいいいしですね。四十七年に入って、二年ぐらいで鼓を始めたんです。似たようなもんですね。

長倉 いえ、でも、そちらはずつと上達なさって……はずかしい。

出席者（発言順）

田辺 博章（東京支社・観世）
小山 しづり（東京研究所・宝生）
長倉 久子（富士工場・宝生）
鍛冶 義延（東京研究所・宝生）
須藤 恵紀（土浦工場・観世）
山田 義之（堺工場・観世）
沢野 忠男（防府工場・観世）
司会

山家多喜男（四日市工場・観世）
まとめ

浅井 勝（富士工場・観世）

司会 いえ、そんなことないですよ。（あわてて次の人を指名）

鍛冶 私の入社は四十八年です。ね。東研で実習がありまして、それが森研でした。そのあと防府工場に配属になったわけですが、その時森研でお別れの席設けてくれました。その席でかなり強く謡に誘われたんです。でついうっかり東研に戻ってくることになったら謡をやりますよなんていったら、一年後に東研に転職になりました（笑）それでもまだ



「ついうっかり謡をやるといって…」(鍛治)。左から田辺さん・小山さん・長倉さん・鍛治さん

覚えていて男の約束だからと四十九年に始めたわけです。うとう会は、五十一年の希望荘でして、その時は融の連吟をやりました。当時は夢中で懇親会の記憶はあるんですが、謡の方はあまり覚えていません。

当時、組合の役員をやっていた関係もありまして翌年の三井寺から懇親会の司会をやらせていただくようになりまして、あの冷えた飯をたべています。

東研の宝生も先輩たちがご栄転されまして仲間もだんだん少なくなり昨年から私が部長をやるようになりました。今後は、いろいろな人たち

のご意見をお聞きして人集めとか練習のやり方について参考にしたいと思います。

クモの糸にひっかかり

司会 その辺の話は、後ほどとしまして、須藤さん初舞台の思い出などを……。

須藤 さきはど田辺さんは、富岡さんに強引に、と話されましたが、僕のとときはそれほどなかったです。そうですね富岡グモの張りめぐらしたクモの糸にひっかったという感じですね(笑)それに私も四日市のなつかしさも手伝って……。

それと、私も生活に余裕があるわけでもないんで、手っとり早く旅行ができて、しかも会社から補助が出ると聞いていましたので、そんなことで始めました。

初舞台は、赤とんぼ荘で小袖曾我でした。元来音痴で、人前でしゃべることは苦手でしたが、謡はお経みたいなもので、抑揚がなくて、大きな声さえ出してればいいじゃないかと思ったんです。初舞台では、胸がつまってしまつて……。声を長く続けようと思つて、たくさん息を吸いこみますね、すると終わったとき、まだ息が残つていて

それが出てきてしまって苦しかったなあという感じがありましたね。

それと、会に出てきますと前にお世話になった人たちと旧交を暖めることができるんで謡はどうでもいいんですけど、毎年でてきたいなあと思ひます。

山田 私の最初は、あじろ荘でやったときです。古くは古いことですが、その時は羽衣の連吟をやったと思います。うとう会に初参加したときですが、堺から参加した者は、もう寝ようかと床についたんですが、どの部屋からも鼓や太鼓の音が鳴りだしまして、とても寝てられんというので、また起き出して練習を始めたということ覚えていています。

また、土浦の須藤さんもおっしゃっていました。うとう会では、堺から転勤された方々がいろいろな事業場におられますが、この会を通じてお会いできる点がいいですね。それと、外の事業場はきびしく勧誘されているようですが、堺はその点おとなしくやっております。でも今年はお若い人がふえまして……。

自分のレベルが一目でわかる

司会 今年は、堺は新人二人を連れてこられて成績がよかったですね。

おとなしく勧誘されても実績があれがいいわけ……(笑)

沢野 私は、四、五年前からの参加です。

うとう会についてですが、ベテランからきうきよう初めた新人までが参加されていて真剣に練習の成果を発表されており、自分のレベルが一目でわかる会だと思っています。

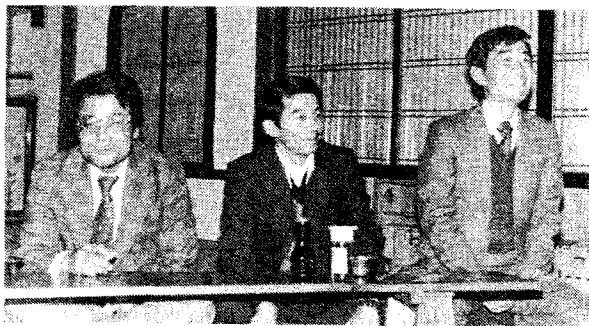
一年の練習で自分がどのくらいになったのか、昨年とくらべてどうだったかなど自分なりに評価ができて、いろいろな曲、いろいろなうたい方があり参考になります。最近きびしさがちょっと足りないのではないかなという気がしますが……(笑)

「秋」といったら「うとう会」

司会 さて、この座談会のメンバー選定のねらいですが、これが掲載されます二〇周年記念誌を新人の勧誘にぜひ使いたいと思ひまして、それにはベテランの話ももちろん参考になります。それより初心者の方の方が案外参考になるんじゃないかと思ひましてね。中にはかなりのレベルにある方もおられますが、入っていただきました。

そういう意味で、うとう会につい

ての現在の心境をお聞かせください。
沢野 全社の中でも会社の補助を
いただいてやっているのは文化クラ
ブでは、このうとう会だけではな
かと思えます。スポーツであればテ
ニスぐらいでしょうか。他は対外試
合がほとんどで。そういった面でこ
れだけは続けたい。秋といったら
「うとう会」（拍手、声援あり）と
会社で強く印象づけるためにもず
っと続けてほしいですね。
防府から大勢参加しますと、運賃
もかなり苦勞しますので補助は助
かります。



「秋といったらうとう会…」(沢野)。左から
須藤さん・山田さん・沢野さん

また、ベテランの方々も定年だか
ら引退するなどといわれず、末永く
参加してうとう会を盛りたててほ
しいと思います。

文化部で協和全体が集まるのは、
これしかないと思いますので、これ
を誇りにしていきたいと思います。

謡と西洋音楽に共通点

司会 たいへん力強いご意見をい
ただきました。そう力強くなくて
も、ななめにかまえたご意見でも結
構ですからお願いします。

小山 私が謡に関して思うことで
すが、私たちの年代は、日本音楽と
いいますと、とかく老人のやるもの
だと思っている人が、ずいぶんいる
と思うんです。でも本質的には、西
洋音楽と謡いは似たところがあるよ
うに思えます。私は今オーケスト
ラの方もやっているんですけど（注
ビオラ奏者）拍子のとり方はかなり
違いますが、息の入れ方が似ている
ところがあるんです。それはどこだ
というまでにはいたっていませんが
……。

秋田の方に「わらび座」というオ
ーケストラがあるんですけど、そ
こに入団するには西洋楽器ができる
ことと日本の楽器ができること

が条件なんです。日本人なら日本
の楽器も必要だという心意気がうれ
しいですね。（場外から声あり「日本
の小唄、端唄、俗曲みんないいぞ。
もっとも私の小唄は、宝生流になる
が、日本の音楽をもっと愛しましょ
う」といいたいね。」）

司会 日本人である以上、日本音
楽には心の上で繋がるものがたくさ
んあるように思います。鍛冶さん
いかがですか。

鍛冶 謡に関して僕はまだまだわ
からない面がたくさんあるんですが
今お話がありました日本音楽には興
味をもっています。

東京のど真中のある団地の子供は
日本語の子守歌が一番よく眠るとい
う研究報告があったりするぐらいに
周囲がいくら西洋的になっても、し
ゃべり言葉の調子が心に響くものな
んです。

それどうとう会に関しては、そん
なに力強いことは申し上げられませ
んが、大いに懇親会の充実（笑）を
はかりたいと思います。

うとう会が終わったら、また仕事を
一生懸命にやる！

集団ブレイの妙味を体得

田辺 私は謡曲に誘われる前は詩

吟をやっていました、詩吟のサーク
ルが崩壊しまして、ちょうど渡りに
舟のように誘われて謡に入ったんで
すが、詩吟と謡曲のちがいを一言で
いうと、個人ブレイと合同演奏の違
いだろうと思います。

謡のよさは、やはりみんなの合奏
であるという点だと思います。

これが能の形になると、囃方、仕
舞やる方との合奏になる。みんなの
和の極限状態で表現されるものが能
という芸術じゃないかと自分で評価
しています。西洋音楽の中にもオペ
ラがありますが、それ以上によさを
秘めた芸術だと思います。

西洋のオペラは楽符があり、全体
を指揮する指揮者が一人いますが、
能の場合は、地頭はありますが、こ
れも全体を指揮するわけではないし。
聞いた話ですが、プロの能楽師さん
の間には「仕掛ける」という台詞が
あるといえます。これは地頭がシテ
に仕掛ける、つまり自分のテンポに
引き込もうとしてテンポを早めたり
遅めたりする、これに対してシテが
応じて微妙に反応する、あるいは囃
方が反応するといえます。そういう
相互の関係が実に面白くて、集団ブ
レイの妙味が、謡の中で体得でき
るんじゃないかと思っています。

こういう意味で、もっともっと多くの人が謡を見直して、西洋音楽からもどっていただきたいと思っています。

新しい仲間を増やすために

司会 謡の心を極めたようなお話でしたが、こういう若い人がたくさんいますのうとう会も心強く安心していただいて結構かと思えます。

こうしたお話をもう少しやりたいのですが、時間の制約もありますので、次の話題に移らせていただきます。

で、今日お集まりいただいたのは、各グループのお世話で日ごろ苦勞をかけている方々ですので、今後の新人の勧誘をいかにやっていけばいいのか、その辺のところをお聞きたいと思っています。今年実績を残されました堺の山田さんからお願います。

山田 今年には新人が三人入ったわけですが、一人は、お茶をやってもらった人で、お茶と謡はつきものだろうと勧めた人、もう一人は、平尾工場長が宝生流に誘った人ですが、堺はみな観世の先生に習っているんで観世に入ってもらった人で、もう一人は、なにもやっていない者でして健康にもいいのでやと勧めました。

三人とも動機はちがいますが、堺は一時参加しなかった時もありまして、これはいかんという事で努力しました。

司会 須藤さんはご自分の経験からいかがですか。

須藤 この間、家でうなっていましたら、小六の子供が、テレビの水戸黄門より上手だよと(笑)。家でやってますと子供にもリズムのようなものはわかるようになるんじゃないでしょうか。

私は、さきほど鍛冶さんが、懇談会の充実といわれましたが、私もなんか宝生だ観世だとやりあっているような(笑)印象をうけましたのでまず懇親会を大いに充実させて仲良く発展させるようお願いしたいですね。

観世と宝生は一体

高橋 観世と宝生とは一体なんです。素謡はちよっとちがいますが、囃子は諸流一体なんです。明日それを実演しますからよく聞いて下さい。

田辺 うとう会でも今は、観世と宝生をわけていますが、あれはいっしょにでさんのですか。シテを観世ワキが宝生といったように、地謡は合同というわけにはいかんと思いますか……。

安島 参考に私からお話ししよう。かつて富士工場は宝生の方がたくさんおられて、大坪さんが一人観世だったことがありました。そのころ宝生の中に入って大坪さんがうたったことがありますて、さては大坪さん宝生に寝返ったか!と思ったんですが、一人観世でうたわれました。これは高橋さんが、そうした実験を試みたんだと思います。いかがですか高橋さん。

高橋 そうです。その通り。ほかにいうことなし。

聴きたい人たちの参加も

司会 新人がほしいですね。特に女子の新人が。長倉さんいかがです。

長倉 ん……私は特別動機があつてはじめたのではなく、なんとなくです。

あの、若い人にやってみないかと誘うんですが、いろんなものに興味を示すんだけど、日本古来のものには、どうも興味を示しませんね。しつこく誘うのもいやですし……。

話を聞いているともう少ししつこくてもいいのかなと思うんです。堺工場の様子を聞きますとあーいいなあと、ちよっとひがんでみたくなります。

前にはクラブ員でない人が二、三人うとう会を聴きにきたんですけどそれっきりです。

司会 声をかけても受けつけませんか。

長倉 脈のなさそうな人には私も声をかけませんので、まるっきりだめということではないんですが。富士には前にやっていた人が結構いますし、もっと女子が参加するといいいんですが。

小山 今はほかに遊ぶことがたくさんありますので、なかなか誘いづらいんです。

こういう機会に聴きたい人に参加してもらったらいかがでしょうか。今は謡をうたう人の会ですが、聴く人の会でもいいのではないのでしょうか。聴くことによって底辺を広げれば、謡をやる人も増える可能性はあると思うんです。(賛成!の声多数)

司会 まだまだご意見をうかがいたいと思いますが、時間もきましたので、この辺で終りたいと思います。ベテランの皆さんの期待に応えるよう、私たち若手は努力しなければなりません、今日のお話の様子は、十分応えられそうな気がしてきました。ありがとうございました。

協和とうとう会

20年の足跡

水原一瓢

はじめに

「協和とうとう会」の第20回大会を記念して小冊子を作ろう、という声が起こったのが、先年（第19回）の打上げの時。いつものことながら「安請合いの口の災い」……という

のも、14回以前の関係書類は全部筆者が持ち歩いており、50年の暮に（財）クリーン・ジャパン・センタ―に出向してから、そのファイナル・ボックスのひとつを占領してしまいました。

このようなわけで、時日の経過とともに第1回からのまとめという責任が次第に重くのしかかってきて、とうとう約半年。この五月の連休に手をつけないと秋の会に間に合わないということ、思い切って始めた次第です。

番組のファイル、写真集、資料な

どを3㎡ぐらいのかなり大きな食卓の上にのせてみると、ちょっとした「山」。安島さんから受取った15回以後の資料も合わせ、これをどのよう解きほぐしていったらいいか……かなりぬけている部分もあるようで、目下やや暗然の態といったところ。

昔の番組をめぐってみると、あの時こんな曲をやったのか……などとは完全に忘れてしまっている、自分でも驚くような事が沢山みつかります。そこでまとめ方としては、「番組」はできるだけ忠実に再現し、それにエピソード（筆者の忘れた所は皆さんに聞いて）などを加えて書いてみた……と考えました。

どのようなものができあがるか、今のところ皆目見当が付きませんが、とにかくペンを持つてみることにします。

（56・5・2記）

「協和とうとう会」の名称

学生時代・三島時代・盛岡時代：

……と、番組のファイルを一枚一枚見ているのですが、古いものは20、30年前のガリ版ですから、赤茶けてシミも沢山出ています。少し筆者の私事にも関係するので恐縮ですが、まず目についたのは、盛岡工場時代のものです。この頃、簡裁の判事で石沢さんという方（宝生流囑託）がおられ、私にとつては謡・鼓・太鼓の先生というだけでなく、人生の師でもありました。小生も未熟ながら盛岡宝生会の一員として末席におりま



第19回で「実盛」を舞う筆者

したが、石沢先生とともに囃子のグループを作っておりました。そしてその会の名前について先生といろいろ考えあぐねた末、「謡う」ということと、鼓や太鼓を「打とう」というふたつの言葉をかけて「とうとう会」がよいということになりました。すっかり忘れていましたが、ここに左記のようなタイトルの番組が残っています。

第一回とうとう会囃子会番組
とき・昭32・4・17（水）17時半始
ところ・木伏・鉄道クラブ

この頃、盛岡工場内でも謡曲部を作り、十人ていど集って稽古をしていました。北田宗平さんもその一員であり、前記のとうとう会へも加わって、彼は太鼓をしていました。

この会はその後も続いたようですが、私はこの年の五月に、東北沢にあった旧東京研究所へ転勤になりました。こたつの中で酒杯を傾けながら、ああでもないこうでもないといふ石沢先生と会の名称をひねっていた夜のことをいまでも思い出しますが、後の「協和とうとう会」というのは、この時の思案がもとになっております。

（石沢先生は一年前に亡くなりました）

「観・宝合同」の胚胎

協和とう会は、観世と宝生の二流合同ですと運営されてきました。が、まだこのかたが作られない頃、合同開催の胚芽という意味で忘れられないことがあります。それは昭和30年の7月のことです。

筆者らが改装なった盛岡工場で、アミロ・液体黒こうじ折衷法によるアルコール発酵を始めるに当り、まず千葉・稲毛の微工研と政府の工場、ついで防府工場へ一カ月ほどの見学・実習の出張をしたことがあります。このころ防府では、新井純先生（当時、技術部長）を師として観世の謡曲部が活発な活動をされており、現在の観世流中堅の人たちは、ほとんどこの教室の出身者です。

「遠くからよく来た」ということで、一夕、クラブで歓迎の意を兼ねた謡会を開いてくれました。小生大いに感激して謡ったり打ったり、た

本社・東研・富士

観宝合同謡会 35・7・17

（第1回うとう会に相当）

熱海荘

しか番組外で鶴亀の太鼓も打ったように記憶します。「岩千鳥」が協和醗酵と合併になり、はじめて主力工場の防府に行つて、新参者一人を加えて会をしてくれたそのことがひどく喜しかったのです。その時の開催の世話を熱心にしていたのは、記憶違いでなければ西村淳さんだったと思います。

宝生はたまたま私一人でしたが、この一夕の会が観宝合同の嚆矢と言えます。防府の観世はその後ますます隆盛となり、盛岡の宝生は私の東研転勤と共に消滅しました。

記念にその時の番組を記載しておきますが、新井・小野・今井・森脇・水野・和田・西村・浅井・海野・磯部……など、うとう会と縁の深い名が見えます。また女性方の多くは社内結婚によって〇〇夫人となられその意味からも懐しい番組であります。（28ページ参照）

わかると思いますが）。富岡啓太郎さんも「第1回の前に何かあったように思う」ということでした。

高橋孝夫さんの記憶メモと小生の資料と突き合わせて考えてみた結果、昭和35年の熱海荘でのこの会を、うとう会と命名される前の、第1回に相当する会ということにしてよいと思います。番組としては、仕舞・囃子・一調のそろったなかなか立派な内容で、現在も活躍している人の名版に納めるため、小生の小さな字で二段組みで書いてあります。事業場別の参加人員・世話役担当・経理・写真などの資料は小生持っています。生あての手紙の中に残っています。さてこの会でひとつの事件がありました。二階の二部屋と一階の廊下を隔てた小部屋ふたつに服や荷物をおいて、翌日の申し合わせや宴会をどんちゃんやっている最中に泥棒に入られ、ほとんどすべての人がやら

れてしまったのです。熱海荘が健保の寮となつて日も浅く金庫も用意していなかったこともあり、当時の幾度人事部長（故人）の特別のお計いで、被害の全額を会社が負担してくれることになりましたが、その時は一同青くなるやらしゃくにさわるやら……。西村さんはどういうわけか財布を部屋の鏡台の引出しに入れておいたのが被害ゼロ。筆者は、恥かしながら財布を持たず、小銭入れに札を押し込んでズボンのポケットに入れておいたので無事。一番の高額はたしか新井先生。運よくふたつに分けておられてそのひとつが助かったので、翌日皆でそれをお借りして東京まで帰りついたという次第です。この時の泥棒、会社の寮専門の空巣で、一二年後につかまったそうです。

連綿と続くうとう会も、実はその第1回に盗難という洗礼によって出発したわけであります。（28ページ参照）

第2回うとう会（昭36・8・20）

伊豆・修善寺温泉 あさば旅館

小生の手もとには資料がなく、番組は新井さんからいただきました。

この第2回から「うとう会」の名が見えます。おそらく第1回のあとで何か名称を考えようという声が起こり、筆者が盛岡時代につけた「うとう会」を思い起こして提案したのと思われる。

その頃でも、盛岡では石沢先生を中心にうとう会なるものが活動しており、所を異にした発案者のひとりとはいえず、無断で使用するこゝにはちよつとはばかりを感じて、石沢先生に「協和うとう会」と上に協和をつけた形で了解をいただく手紙を出したことを憶えています。

このガリ版の番組は達筆で高橋さんの字のようですが、初めての使用の時から協和がぬけております。最近の番組では時折「協和」が復活している時もあります。

さて「あさばの会」ですが、筆者は前に、森永のベニシリン工場（伊豆・大場）に勤めていた関係もあり、この旅館には何回か泊ったことがあります。大池を隔てた山裾に古い舞台があり、そこで謡っている水面を渡って見所ともいえる旅館の建物までよく声が通ります。ひなびた中に何とも幽妙な趣があります。

加賀藩の家老の分家が所有していたものをあさばの先々代が譲り受け

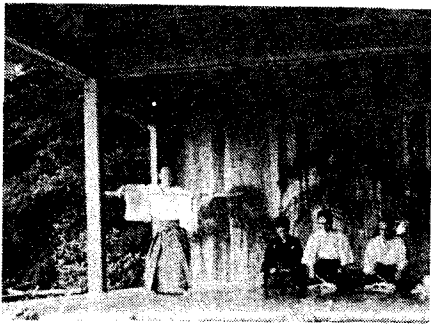
大正年間に修善寺に移したものとわれています。旅館代が結構高いので、一部屋に何人も重なって寝て一人当りを安くしたように思います。

この時は真夏でかなり暑く、それに松材の舞台板が固いので足が痛くなって、多少難行苦行の感がありました。長刀を振ってさっそうと熊坂を舞った富岡さんの姿が印象に残っています。

この舞台については、後に狩野川台風によってうしろの山が崩れ、鏡の間や橋掛りがこわれましたが、現在では立派に改修され、各流の先生方に利用されているようです。

この会の資料は残っていませんので、番組から参加者表を作成しておきます。

（29ページ参照）



「熊坂」を舞う富岡さん（第2回）

第3回うとう会（昭37・6・17）

協和健保 熱海荘

この第3回については余り鮮明な記憶がなく、皆さんに問うても反応がありませんでした。番組によれば、

仕舞四番（富岡・西村・望月・新井）
舞囃子（望月）、居囃子三番、素謡
おきます。（30ページ参照）

第4回うとう会（昭38・6・23）

協和健保 熱海荘

このあたり熱海荘での会が続いており、曲目・参加人員とも前回と大差ありません。今回は富士工場の女性の参加が多く、この方々は朝三島から行けるので、収容人員の少ない熱海荘でも大丈夫ということになったわけです。

この年初めて命尾静子先生の参加ご指導を得、小ぢんまりした会もぐっと引きしまったように思います。命尾先生のことについては機会あるごとにお話していますが、ここでごく簡単にご紹介しておきます。師は若くして宝生宗家・先代九郎のもとに内弟子に入り、深川の家に

通われました。従来女人禁制であった能の本舞台で、女性として初めて道成寺を披かれた第一号で、四拍子の堪能なことには驚嘆します。現在協和醗酵の同好中堅以上で富士工場にいた人の大方は、観・宝の別なく師のもとで笛・太鼓・大鼓・小鼓の薫陶を受け転勤で各地に散っています。これらの人が一年に一回、七夕の星のようにうとう会に集まってきた、曲りなりにも囃子を演奏できるのはこのような理由によります。富岡さん、高橋さんなどセミ・プロともいえる方がたがあり、ひとつの会社の中で何とか四拍子を合わせられ

るといふのは本当に珍しいことで誠に誇らしいのですが、これも命尾師の直接、間接のおかげと申せましよう。先生の本名は蛭海静子、宝生流の地方の名門であった命尾家を受け襲われたわけです。

この4回には、宝生の夫人方が初参加されており、どうしたわけか親世の新井・磯部両氏の顔が見えません。命尾先生は、番外で笹の段を舞われています。(31ページ参照)

第5回うとう会 (昭40・10・31)

協和健保 熱海荘

第4回が昭和38年、第5回が40年ですから、資料の限りでは39年はうとう会を開催しなかったようです。

ちょうど経営合理化のあとでもあり

そんなことも影響しているのかもしれない。筆者が、どこかで回数を間違えたように思っていたのは、39

年のこの年あたりが原因のようです。これで氷解。今年の第20回は間違い

ありません。今回も、富士の高橋さんのお世話で命尾先生に応援・指導

していただきました。この回から東

研の宝生が八名加わり、土蜘蛛と紅葉

狩で初舞台。現在の安島名幹事はこの

年より番組に現われ、新井さんがシ

テを勤めた「三井寺」でワキツレ

を謡っています。

(小)を牧野母堂、狸々と山姥の(太)は命尾先生が打っておられます。また師の番外仕舞は野宮。高橋さんともうひとり、たしか三人で地を謡ったと思いますが、舞をやらねばその地は謡えるはずもなく、小生この頃は舞を始めてまだ一二年の頃で、もとより野宮などという難曲はつい最近習ったくらいのもので、さぞかし命尾先生、内心では……と思うと今でも冷汗三斗の思いです。

筆者の手もとには、この回からかなりしっかりした資料が残っています。事後の会計報告や写真の配布を始めたのはこの時からで、今資料を見ますと感無量のものがあります。一人当りの宿泊代・四五〇円、夜の一杯代・一五〇円、昼の弁当(すし)・一五〇円、面白いのが、アルバイ

ト一人頼んで一、〇〇〇円(一人当りの負担五〇円)という領収書があります。とにかく東京組は一泊して一日謡って全部で八三〇円。富士組は日帰りで三八〇円で済んでいます。今から十六年前のこと、今の約十分の一といった感じでしょうか。

今回から始めた写真の作成・配布では、事業場ごと各人ごとに見本を回覧して注文をとっています。このあと何年かこの方式を続けるわけですが、今考えるとよく面倒なことを勤勉にやったものです。事後全員に配布した会計報告の末尾に、来年も

第6回うとう会 (昭41・11・20)

熱海市海岸 つるやホテル

参加人員の膨張という現象をかかえて、うとう会はこの年から会場を求めての放浪が始まります。東京・富士・四日市のできれば中間点という静岡県あたりになるので、富士の高橋さんがこの後何年かの間、宿泊所・会場を求めて大奮闘することになります。その手始めに、今回はつるやホテルの夫人が熱海宝生会の会長として活躍されているとのこと、交渉の結果ここに決まりました。

盛会を期したいが、会場が変わって宿泊代が高くなるかもしれないので各グループで積立てを始めたかどうか……などとアピールしています。今回は35名、今後の運営に熱海荘では小さすぎるのではないかと感じ始めている様子が見えます。また今まで夏ばかりだったのが、この5回から秋の開催となり、これが現在まで踏襲されているわけです。

いわゆる「会」としての運営は、この第5回に概略の基礎ができて上がったように思われます。(32ページ参照)

この時の番組は高橋さんの字によるガリ版です。不参加の方々もあり会の進行も臨機に行うので、実際の結果は予定の番組と多少違った形になります。そこで修正版を資料として残そうということも考えたのですが、会の進行の世話が多忙なので、なかなか完全にはできません。この6回の会では、たしか安島さんと思いますが現実通りの修正番組を残してくれたので、ここにはそれを記載することにします。

今回は服部・丸田・森山・西村・河野・守弘さんから東京の夫人方の参加が特徴的です。命尾師のご息女・

第7回うとう会 (昭43・10・20)

四日市倉庫 湯の山保養所

理由は忘れましたが、昭和42年は開催せず、とんで43年に第7回ということになりました。この時は水野さん、富岡さんをはじめとする四日市(大協和)の面々が八面六臂の大活躍でした。四日市倉庫(株)の堀木専務が藤波涛洗会員で、水野さんが小波会員、地元の熊沢師範との関係も深く、大協石油の方々も加わり四日市倉庫の保養所をお借りすること

蛭海雅子さんが初参加で、仕舞。先生は番外仕舞として江口。囃子は四番。(大)富岡・(小)水原・(太)命尾師・(笛)蛭海・(地)高橋ほかによる早笛・働入りの居囃子(船弁慶)がはじめて演奏されました。大広間の舞台は、旅館によくある間口は広いが奥行の狭いものなので蛭海(殺生石)、富岡(春日竜神)、師の番外(江口)の仕舞。望月さんの舞囃子(松虫)など、ちょっとひしゃげた横広の動きになりましたが、そこはベテラン、狭い板を上手に使って見事に舞い納めました。(33ページ参照)

になったわけで、「湯の山拡大大会」といった様相を呈しました。また今回から、川崎工場長を先頭に堺の面々が総勢6名、山を越えて参加されたのがエポックメイキングな出来事でした。今回初めてうとう会が富士川を渡って近畿圏へ出るというので、水野・富岡・高橋さんとの連絡も密で、手紙や葉書が束になって残っています。

す。とくに四日市の皆さんが精魂をこめて運営の準備をされたことの表われとして、番組が今回初めて機械印刷によって作成されたことがあります。やはり下手な手書きのガリ版より立派です。またこの時の宿泊・会場の雰囲気もよく、その印象を喜んでか51年、53年に再度湯の山(希望荘)で開催されています。

番組には載っていますが、東研組は何かの理由で参加できなかったようです。手もとに修正版がないので水野さんの経費の明細書から参加人員表を作っておきました。宿泊費・九〇〇円、会費・三五〇円、昼食代・一四〇円、打上費・一六〇円……とあり、泊った東京・堺組が合計

第8回うとう会 (昭44・11・16)

協和網代荘

8月6日、筆者から各方面に出した手紙の中に、「場所・熱海市下多賀杉山洞阪本家・栄阪別荘(一泊二食付一、八〇〇円ぐらい)近々に協和の保養寮になるらしく、そうなればぐっと安くなると思う。大小部屋数十分……」とあります。19日の通信では、九月より当社の寮「網代荘」

一、八〇〇円で済んでおります。ただ、当日の会場費その他は大協和の方々のみで負担しており、一人当たり二、〇〇〇円となっているのは恐縮の至りです。写真関係の書類は残っているのですが、筆者のアルバムには一枚もないのが残念です。

この会で特筆しておきたいのは、藤波涛洗会・熊沢一門が素謡・隅田川を謡われたこと。そして富岡さんのご子息・正典君が子方を立派に演じたことでした。

この会の記事を社内報に執筆投稿したのは四日市の山口豊さんでしたが、安島さんの記憶によると、掲載が恒例化したのはこの回以後のことです。(34ページ参照)

ないと遠くへ帰る人、名所見学のこ
となどあるため、泊まった人も早起
きのこと……などとなります。

前回湯の山で裏方を勤めた水野さ
んからの便りには、川崎（堺）工場
長の意見として、「連休を利用して
一日ゆっくり遊山がしたい。来年は
そのように考えてくれ、11月から堺
では積立を始めた……」などのこと
が記載されています。土・日の連休
を利用して二日間にわたって開催す
るのは第12回（奥山・半増坊）以後
のことですが、これは川崎さんの言
われた遊山のためではなく、うとう
会が膨張して一日の番組では納まり
きれなくなったためです。しかし、
古寺・旧利を会場に選定する幹事の
努力により、深山・美庭を楽しむこ
とができるようになったことも事実
です。

が、会場の広間はプラスチックで手
狭ま、次第に拡大するとうとう会にと
っては間尺に合わず、以後利用され
ることはありませんでした。
経理の総括表によれば、宿泊組は
一、六〇〇円ぐらいですんでいます。
今回の番組は高橋さんのガリ版にも
どつています。ここには安島さんの
修正による実際に行われたものを載
せておきます。
今回初めて浅原さんが参加（阿漕
のシテ）、品のある正確な謡をされ
る鈴木元監査役は二回目。これも二
回目の堺は「井筒」と「通小町」の
難曲。大協石油も婦人方が3名参加
され「紅葉狩」を無本で謡ったのに
は一同驚嘆。囃子は五番出ましたが
「朝長」などという大変なものも見
えます（太なし）。私事ですが、亡
妻が「放下僧」の小歌（小）を打っ
ています。（35ページ参照）

第9回うとう会（昭45・10・18）

三島 佐野別邸

この佐野別邸の会は、参加者が50
名に達したことで、うとう会として
はひとつの節目になるものです。番

組はこの年に初めて手書きのゼロッ
クスとなり、会場案内図の入った高
橋さんのものと参加者名簿をのせた

筆者のものと二通りが残っています。
どちらが現実に近いかを決めるため
に、写真の注文表などとも突き合わ
せた結果、筆者のものを実際版とい
うことにしました。

この年の特記事項は次の通りです。
①大協石油の方々の参加は今年で三
回目、「うちの会社にはこんな和
やかな集りがない」ということで
皆さん大変喜んでおり、来年もお
願いたいと言っていること（水
野さんからの便り）。

②男女の別、申合わせのための囃子
関係者の同宿などややこしい宿泊
条件に苦労したが、ついに同一事
業場の人で「泣き別れ」が出てし
まったこと（筆者から出した謝り
状）。

③網代荘・熱海荘・水明荘の3カ所
に分宿し、朝佐野邸へ出勤という
手順なので、朝寝坊ができないか
ら注意のこと（事前の配布文書）。
④当日は富士工場の茶道部の協賛を
得たこと。

⑤油化には緑さんという笛をやる人
がいるので参加を勧誘するのこ
と（水野さんの手紙）。かくて緑さ
ん初参加、囃子・紅葉狩、小袖曾
我に出演し明調をひろうしたこと。
⑥磯部（武）さんが久しぶりに参加

し、地頭で活躍。

⑦鈴木（正）さんのシテ、新井さん
のワキ、緑さんのワキツレによる
素謡、小鍛冶、本社（宝）山県・
北村両嬢による囃子入りの舞・羽
衣（クセ・キリ）など……。

⑧本社（宝）が13人にふくれて初参
加の人が多かったこと。

⑨本社（観）が謡曲部として初参加
したこと。

……などでしょうか。

参加人員が50人になったことで、
この会のあとでうとう会運営の基
本的な考え方について検討されてい
るので、これを要約しておきます。

（磯部・高橋さん・筆者の間で交
わされた書簡より）

(1)素謡（有本）は一グループ一曲と
し (2)連吟・独吟・仕舞・囃子など
の地は原則として無本 (3)仕舞・舞
囃子を増強する (4)ゆくゆくは袴能
までもってゆく……などといういさ
さかきびしい案に対し、(1)素謡一番
の時間を短くしてもよいから（一部
抜いて演奏）、できるだけ番数を増
加し、全員何らかの役をもてるよう
努力する。

(2)無本の原則はいいが強要せず、自
発にまかせる。(3)2〜3年後に袴能
を目指し、ポツポツ能舞台の会場探

索を始める……何れにしても、仕舞・囃子をやらない素謡党が圧倒的に多いので、これらの人びとが抵抗なくのびのび謡える雰囲気作りを基本としよう……というのが結論です。これらの意見が後の二日続きの開催につながっていったわけです。

佐野別邸の庭も美しく、お茶もよく、すばらしい会であったことを申し添えます。

佐野邸では打上げの会ができないので、終了後田中屋という店の二階に移動しました。この時中山男さ

んが、「うとう会という会があるの

に会長がいけないのはおかしい。大先輩である新井さんに会長になってもらったかどうか」と提案され一同バチバチ。かくて第9回のおわりに「新井うとう会会長」が誕生したのであります。このことは、「日本合アル」に新井会長をお尋ねした時、電話で中川さんにも確認しました。因縁？の田中屋が、そば屋だったかうなぎ屋だったか、新井さんも小生もんとと失念しております。

(36ページ参照)

第10回うとう会 (昭46・10・24)

浜松佐鳴湖畔 西 遠 荘

参加者が徐々に増えてきたうとう会は、先の第9回で50名となり好きな者同志が集まって適宜に楽しむという安易なやり方では運営できない……という実感が、私も幹事連の気持のなかにも迫ってきていました。50人以上を一度に一カ所に、しかも安くという条件はなかなか難しく、熱海荘・網代荘をはじめ、いかげんな民宿などでは当然不可能ということ。どうしても山寺の僧坊や大きな国民宿舎などを対象と

するほかはありません。関東と関西のちょうど中間に位置する富士・高橋さんの宿舎探策も急を告げてきました。

今回は6事業場、観・宝別のグループ数では9。参加と宿泊の有無、部屋割り、演奏曲目と役、囃子の調整など……水野・高橋・富岡・磯部・筆者の間に飛び交った連絡の手紙はまさに束をなしています。中には出張中で何とも決められない。当日臨機にやるからかんべんしろ、など

という悲鳴もグループ責任者の文面にあたりします。(今こうして読み返していると、時間ばかりたって少しも筆が進みません。)

今回は案の定曲目も多くなり、まさに分単位の進行をやらないと、遠いグループは帰りの列車に間に合わなくなる恐れがあります。そこで番組の最下欄には、曲の分数を計算して細い予定時刻を記入しました。番組は数回書直しの後、筆者細かな字でB4版2枚続きのものができ上り各グループに配送しましたが、どうしても直前になっての不参加などで変更が出ます。今回は、安島さんの労作による実演奏の修正版があり、ご丁寧にもこれを清書して事後に発送したものです。ここにはこの表を載せておきます。(37ページ)

この年のトピックスとしては、東研の観世が初参加(八倉巻・木村・岡地3氏)。東研(宝)も久しぶりで参加。今回初めての試みとして、観世ベテラン組が起請文入りで大曲正尊を出しています。(シテ・磯部(武)ワキ・西村、地頭・新井)。囃子は山姥はともかくとして、中舞入りの胡蝶、その太鼓を筆者が打っています。が全く記憶がなく、今打てといわれても自信がありません。

詳しい会計表は資料ファイルの中に見当りませんが、西遠荘の23、24両日の領収証(宿泊・宴会・打上含み)から計算してみますと、宿泊で多少つめ込まれたとはいえるものの一人当り一、九〇〇円以下です。この西遠荘は佐鳴湖の畔のちよつと高いところにあり誠に風光明媚、会場は二階の60畳近い大広間、ちよつと天気もよく実に爽快な一日の清遊でした。

会のあとで磯部さんと意見交換しましたが、参考までにその内容を簡記しておきます。

(1)今までベテランは役をもたず主に地頭を勤めてきた。今回初めて試してみたが、今後ベテランの役による大曲を、観・宝一曲ずつ出すようにしたらどうか。

(2)舞囃子・居囃子は毎回数番出ているが、次回から番囃子を一番導入して味の濃いものにしてはどうか。役・地方・囃子方は夫々遠く隔っている、ので、グループの交流によって稽古すればいい。

(3)人数が多くなってきたので、大広間(または別室)の二つの隅を使い、観・宝別々に謡いまくる歌仙会風の時間を作ってはどうか。当

然本持参の關係から曲目だけは予告し、役はその場で抽選で決める。ユカタなどでやると楽しいから、夏の間とう会も再考してみたら：

(注) この考え方は実行したことがなく、埋もれていたのを今再発見した次第。今後に生かしたいと思うが如何でしょうか。

(4) 工場の定修と夏休みをかみ合わせ

(金) 到着のみで会合はやらす
(土) 朝食早くからとう会。
(日) 食は宴会と翌日の申合わせ。

(日) 午前中とう会継続。昼食と打上げとを兼ね、そのあと解散(観光など)

(注) 現在定着しているのは、この案とよく似ています。

高橋さんも大いに気合いが入っているらしく、会のアとの手紙に、浜松在・奥山半僧坊、本興寺、岩水寺、豊川在・鳳来寺山など次回の会場を研究中……とありました。

(37ページ参照)

第11回とう会 (昭47・9・17)

三島市玉沢 本山妙法華寺

この回が寺の僧坊を利用した初めです。この寺は日蓮聖人を初祖とし、日昭尊者を開山とする七〇〇年の歴史をもつ名刹。三島駅から箱根の方

向へバスで三〇分ほど入った山深いところ(当時バス代六〇円)。信者慰安ということで聴古園の一角に浴室(鉱泉)を設け、法筵・会合・保養・お籠りなどのために大書院を開放しています。ちょうど台風が来ていて天候が悪く、大協石油の人たち

(六人) が急いで帰るなど多少条件が悪かったのですが、今回も地元ということで設営一切、富士・高橋さんの綿密なお世話により盛会のうちに終了しました。

新井会長は今回から日本合成アルコールとして参加。一五、〇〇〇坪の庭園、老杉古松、朝霧の中の散策など、皆さん初めての古寺における開催を楽しまれたようです。久しぶりに命尾師の後見をいただ

き、とう会としては初めて宝生「胡蝶」の番囃子を演奏しました。役、地ともに無本だったように思います。番組は高橋さんにより青地の紙にオフセット刷りのものが作成されましたが、安島・長その他の人の努力によって演奏通りの修正版があり、これに収支報告を加えて参加者に配布しました。ここにはその現実版を掲載しておきます。写真は従来の注文

第12回とう会 (昭48・9・15・16)

浜松北 奥山・半僧坊

かかります。

さてこの寺は、後醍醐天皇の皇子・円明大師の開創ということで歴史は約六〇〇年。臨済・方広寺派の大本山で、老松古杉に包まれた60余棟の諸堂、とくに奇岩怪石が印象的です。浜松駅前からバス約1時間。かなり北に入るわけですが、それはその名も「奥山」。

この度のトピックスは、防府工場(小山・岸田両氏)と大阪の斎藤(弘)さんの初参加。今回は小生家庭の事情あり、番組の事前調整についてはすっかり四日市グループ(水野さん)にお願いしました。

とり方式をやめ、写っている人に適宜配布するという簡便法をとってみました。

参加者総勢72名、総経費約二十万円ですから、一人当り約二、八〇〇円かかったこととなります。この会の時に初めて「蔵酒」が現われたように記憶します(四〇円)。

(39ページ参照)

浅井(昇)さんのシテによる正尊、居囃子・熊坂、舞囃子・玉葛(望月)、高橋さんのシテによる二回目の番囃子・羽衣が出ています。

今回は修正版がありませんので、事前配布の番組をそのまま掲載しておきます。参加者名簿は、高橋さんの宿泊部屋割表と小生の写真配布表などから割り出して作ってみました。翌日参加の作村、滝さんを含み総勢64名。総経費約16万円でしたから、一人当り二、五〇〇円程度ですんだことになります。

第13回うとう会

(昭和49・10・19)

浜松市 館山寺荘

前回終了後、湯の山や大阪市内での開催計画が徐々に練られていたが、本年はとりあえず高橋さんの世話によって、浜松市・館山寺荘が選定されました。浜松駅からバスで40分(当時一六〇円)、内浦湾をロープウェイで渡った対岸にあり、県立公園に指定されている風光明媚な所。うなぎ・スッポン・のり・かきなど海の幸を期待しながら、19日(土)昼までには皆さんいそいそと到着。定刻の13時にはもう初番の声が開始

環境としては申し分なかったのですが、サービスなし、食い物(精進料理)少し、寝巻なし……これも禪寺のこととて当り前。腹を空かせながら皆さん立派に謡い納めました。しかし深山旧刹の思い出、忘れられませんか。寺好きの新井会長が参加されなかったのは残念です。安島さんによると、「蔵酒」を積んだ紅野さんの車が遅れ、自宅へ電話を入れたようです。(41ページ参照)

めていました。うとう会は時間の正確さを誇ります。

番組が盛り沢山というより前回で味をしめ、本年も土・日2日間にわたる開催でした。目新しいこととしては、安島さんのご苦勞により、この回から初めて会社の補助をいただくことになりました。

- (1) 片道の普通運賃+会場費等
- (2) 飲食関係へは使用しない
- (3) 対象は社員(出向社員を含む)
- (4) 一括の形で支給する

という基本的な考え方で運用されます。この時点から、安島さんの方へややこしい経理計算の役が移っていきました。運賃計算や宿泊、飲食費の一人あたりの負担分を算出して各グループごとにまとめてバックするというわけですから、何時間かは会に背を向けて電卓と格闘することになります。その間に自分も謡い、夜の宴会、打上げの司会、全体の時間スケジュールの伝達……と仕事は山ほどあります。私の記憶では、この回あたりから安島さんの総合司会の本格的な活躍が始まったように思えます。安島さんによると、筆者と当時の厚生課長・森山清孝さん(本社・観世)の間で下打合せが行われて会社からの補助が実現したのであって、安島はそれを受けて当時の平田主任と事務的な詰めを行った程度……とありますが、筆者は全く忘れてしまっています。何れにしろこの援助については安島幹事の業績であって、私も会員は随分助かっております。重ねて会社に対しお礼申し上げる次第です。

本年初めて宇部工場の観世が藤沢佐都子さんを中心として4名参加され、いよいようとう会の版図も広がってきました。磯部(武)さんが大

阪として参加(4名)。東研(観)に元氣な野口・志村2名が加わり計6名。東研(宝)も12名に増加。転勤により岡田さんが富士組として出席。初めて山家さん(油化)の顔が見えます。

演奏面では、山家さんの独鼓(小)百万、高橋さんの独吟(勸進帳)。小鼓をする人総勢8名による連調(羽衣キリ)が大、太、笛入りで圧巻。本年は東研(宝)の正尊。磯部(シテ)水原(ワキ)による、名実ともに観宝合同の道成寺。居囃子は二番。舞囃子三番という盛況。それに今回初めて観世方の番囃子・班女(シテ・浅井、ワキ・大坪)が最終を飾りました。

参加人員は、どれが変更後の確定版かよくわかりませんので、番組・地割表・宿泊部屋割り表などから何とか作ってみました。合計74人、史上最高であります。なお前回のあとでアピールした会員の名簿作りは、グループ責任者を委嘱するなどして一応の完成をみましたが、転勤などによる変更が激しく、機能を発揮しないまま資料袋の中に残っています。

(42ページ参照)

第14回とう会 (昭50・10・18・19)

大阪・吹田 山手会館

今まで各グループへ流す正式な文書は筆者のところから出ていたのですが、今回から安島さんがこの事務を引き受け、「とう会・事務局」の名でいよいよ本格的になりました。

まして今度の大阪の会は、磯部さんをはじめ斎藤さん、浅原さんなど大阪組の肝入りで、板の本格舞台を借りるという画期的なもので、しかも防府・宇部はもとより初めて門司も参加する名実ともに全国大会であります。費用については事務局から

五、五〇〇円+自前の交通費ということで、財布の中身の準備をよろしく……。

と注意をしています。何せ初めて大都會の真中でやるうというのですから無理ありません。その上、とう会の草分けとして会をこまで築いてこられた富士・高橋さんの現役最後の記念の会ということもあり幹事一同手綱をしめて準備にかかったわけではあります。

まず大阪市内で80人以上が安く泊れる宿を探すことから磯部さんの苦

労が始まります。あそこもだめこ

もだめ……と筆者あての通信が何通も残っています。80個以上の昼食を請負ってくれる店の探索も大変です。会社に入っている給食会社ではどうだろうか(二七〇円)、これでは少し貧弱で文句が出るかもしれないから少し質を向上して三五〇円ぐらいにしようか……などとあります。

結局宿泊はニューナニワ・ホテル(南区大和町)泊(食付で三、五〇〇円と決まりました。まさに当時としても折衝努力の成果です。

さて盛り沢山の番組をこなすためには、朝の起床から分刻みの戦争となります。

次に出る人は、前の曲をやっているうちに控室に集まって待機していること。そうすれば、見所がギョウ詰めということもない……などという注意書きもあります。宿所と会場の間を電車や車で往復するといふ少し落付かない条件も初めてのことで、極端に言えば起床から就寝までが進行係の責任範囲。従って各担

当世話係の役割りも細分化され綿密に決められました。

会場についての磯部さんの手紙には「千里の近くで持主は松井さんという高校の校長をひかれた人。立派な稽古舞台(本舞台よりタテヨコ3尺狭い)。鏡には松あり。正面の見所は25畳、ワキ正面は16畳、使用料平日は八、〇〇〇円、日・祭は一〇、〇〇〇円。何とかとう会でも借りれそう……」などとありました。

写真は今まで小生か水野さんが撮影し、作成・注文とり、配布・代金回収などは筆者がやってきたのですが、今回は袴能などで大変なので、誰かに頼めないだろうか……などと頼んでいます。安島さんの会社補助に対する申請も、文字通り全国大会につき……と力が入っています。

緑色の横長の紙の表裏に、史上最多の曲目を盛った立派な番組が大坂方の手によって作られました。今数え直してみると素謡19、独・連吟8、仕舞12、独・連調3、居囃子3、舞囃子1、袴能1ということ、ひとつの会社の中でこれほどの会が開けること自体稀有のことと思います。

前日は宇部(女性)の雲雀山ほか。キリに高橋さんが番外ということ

薪之段(鉢木)の独吟。心情を盛った選曲でした。翌日は山家さんのシテの嵐山。久し振りの堺組による正尊。防府(女性)による葵上。門司の船弁慶。観世のベテランによる大曲「大原御幸」。とくに初参加の防府・森脇亮さんの仕舞、謡の立派なこと、および柳椒子さんの仕舞・野守、その入魂の舞は印象的でした。そしてキリは、とう会始まって以来初めての袴能「狸々」をもってめでたく終演しました。

今回は本格的な板で少し足が痛いようでしたが、本当にすばらしい二日間でした。忘れられないのは、笠原利雄さんが謡そっちのけで、終始写真撮影に全力を傾けてくれたことです。おかげで皆楽しいアルバムを持つことができました。

ここに修正版と思われる番組を掲げておきますので、当時の思い出のよすがとしてください。会が終わったあとの磯部さんの手紙には、今後の運営などについて綿々と述べたあとに、「……とう会も終り、何かはりあいがぬけた感じ……」とありました。

(44ページ参照)

第15回うとう会 (昭51・11・6〜7)

湯の山 希望荘

うとう会20年の歴史を回想してみ
るのに、この回以前まではその基礎
固めの時代であり、14回の大阪舞台
での会はその前期総仕上げという感
があります。15回からは筋立てにも
運営にも皆がなれて、一応の定常期
に入ったように思われ、参加数も80
名台に安定しています。

安島さんから厚生課長へ提出した
申請書にも、

例年通りOBを含めた同好者の全
社的な集いとして……経費節減のき
びしい折ではありますが、格別のご
理解とご配慮を……

といった表現があり、初めて補助
を願った時のような気負いは見られ
ません。

今回は四日市組の肝入りで、湯の
山の希望荘が選定されました。一階
の大広間(90畳)を会場とし、それ
に中広間(60畳)もあるので練習・
申合わせにはこの上なく、風景も雰
囲気も最高でした。皆さん満足の余
りか、一回おいて第17回も再度こ
を会場にしています。

四日市の方々の力の入れ方も格別
なものがあり、鏡板(衝立風)と舞
台位置設定用の青竹(支柱付き)が
製作されました。鏡板には立派な松
の絵が書かれ、分解・運搬が可能で
あります。会場に入ってまずこの設
備に度肝を抜かれたのですが、これ
らが皆四日市の方々の手作りと聞い
てまたあ然。この鏡の前青竹の区画
の中で、すべての謡、舞が演奏され
たわけです。

防府の藤戸、門司の和布刈、宇部
の加茂。合アルとしては新井会長
のシテによる玄象。それに筆者が盛岡
時代に南部公の蔵の中から発見し手
を加えてまとめた「岩手山」という
稀曲。また観世(合同)の大曲・景
清。居囃子一番、舞囃子三番。……
何れにしろ90畳の大広間なので演ず
る方も見所もゆっくりにたっぷり。誠
に豊かな二日間でした。

九月一日付で富岡さんの土浦転勤
のこともあり、また私事ですすが、筆
者が前年の11月末に(財)クリーン
・ジャパン・センターへ出向したこ

ともあり、この会あたりから世話役
の新旧交替が次第になされ、四日市
・山家さんの活躍も始まります。

なお資料を見ていましたら、「打
上会で新人賞、努力賞などを出すよ
うにしたらはげみにもなっているが
……」という意見が出ております。
これに対し、磯部さんと筆者は「上
手下手は別として、皆が楽しく……

第16回うとう会 (昭52・11・5〜6)

三井寺 法泉院

天台寺門宗の総本山、園城寺とし
て能・謡に縁の深い名利・三井寺。

番組・山家さん、会場・斉藤、磯部
さんのお骨折りによります。各事業

場場の返事を集めると、予定として103
人になりそうだったので、大阪方
の幹事はかなり腰を入れたようで、
宿泊や交通の案内は詳細をきわめた
ものでした。「寺のことゆえセルフ
サービスはある程度覚悟のこと。三
井寺の夜はかなり冷えるかもしれない
から、セーターなどの用意が必要
……」などと注意を流しています。

観世合同の隅田川。宝生合同の藤
戸。今回は土浦から、富岡さんが大
人数を率いて参加し、大仏供養。舞

という初回からの趣旨と、謡本来の
精神からこの件一寸気が進まない……
などという返事が出されています。
会のおとに安島さん出の配布文書
に、会場よし、参加者多し、中身
よし……とありました。

(注) 部屋割り、地割り、修正番
組の三つから参加者一覧を
作成 (46ページ参照)

筆者の記憶では、たしか当日は雨
だったように思います。境内を散策
できなかったのか、余り寺の風景を覚えて
いません。それに今まで書き忘れて
いましたが、僧坊の会には必ず朝の
勤行や説教には有志が参加していま
す。

寺が会場の時にはいかにも「手作
りのうとう会」といった感じですが。
今回は斉藤さんの飲物確保の努力も
あって、一泊三食付で四、〇〇〇円

也。有難いお寺でした。会社補助38万、徴収33万円、結局87名の参加です。一人当たり四、五〇〇円なにしたの出費でできたことになります(足代負担分除き)。またこの会の設営に関しては大変な苦労があったように、予約後にお寺の奥様から断りの報が入り、あわてて磯部、斎藤二氏が伺い、加藤会長のお話をしたりして、それでは……ということになったのだそうです(磯部さんの話)

第17回うとう会

(昭53・11・4・5)

湯の山 希望荘

前回のあと筆者のほうから、「本舞台への憧憬絶ちがたし。奈良には金春さんの舞台あるはず。堺さんひとつ折衝たのむ……」という注文を出しました。しばらくして、福井さんから「宿泊に難あり」ということで奈良を断念。前々回と同じ湯の山に決定。油化・山家さんたちに再度の世話を願うことになりました。

この回から、宿泊・番組作成など事業場間のひん繋な連絡にファックスが使われ始めています。この会から、(宝)森さんが本社から、平尾

また会場の広さの不足もさることながら、きびしい住職夫人の「追及」に世話役一同汗だくの苦労もあったようです(安島談)。寝所が狭く史上最高の重なり具合で、いびきどこのさわぎでなかったように記憶します。

秋深い三井寺でのうとう会、…月には乱るる心あり。ましてやつたなき幹事なれば、許し給えや人びとよ……と安島さんの配布文書にありました。(47ページ参照)

さんが堺から(観)浅原さんが九州から参加しています。今度も番組は盛り沢山で数えてみますと、素謡・19、独、連吟・11、独、連調・3、仕舞・7、舞囃子・2、でした。素謡では、観世合同で大曲・正尊と松風、宝生合同で道成寺を出しています。

参加人員81名、会社補助約三十五万円。徴収四三四、〇〇〇円なので一人当りの出費は片道の足代+五、四〇〇円ぐらいということになりました。うか。

この会に、四日市研究所・上森茂さんの自作の面(小面)が掲覧され

第18回うとう会

(昭54・10・20・21)

竜野市 赤とんぼ荘

播磨の小京都といわれる竜野市の高台、播磨平野を一望に、遠く瀬戸の島々を望む風光絶佳の地。第18回はここが選定されました。国民宿舎「赤とんぼ」の名は、郷土の詩人・三木露風の代表作「赤とんぼ」に因んでつけられたとのこと。

「……ひとつの曲を事業場の枠を越えて皆で謡うことによって、協和の連帯感を一段と深め……今回初めて、日本列島の中央より少し西寄りになったため、例年より多少交通費が増えることになりましたが、よろしく……」。安島さんの申請書の中の一節です。

今回の選定は磯部さんの努力によるもので、詳細な下見の報告が残っています。この時は、20号台風が関西に上陸し、日本を駆けぬけた直後で、交通機関が大混乱し、竜野までたどりつくのに皆さん苦労したようです。私事で恐縮ですが、筆者の場合は、まず小田急で何とか小田原ま

皆を感じさせました。

(49ページ参照)

で出たのはいいのですが、新幹線も東海道も全面ストップ。仕方なく帰ろうとしていたところ、時刻表を見上げている高橋さんとはったり。いろいろ足を探した末、わずかに動いている各停しか方法がなく、一駅でも竜野へ近づこう、という悲壮な決意で、通勤・通学用の電車に乗り継ぎ乗り換え。名古屋までたしか六、七時間。まさに終戦直後以来のことでした。私どもは同行2人、話し相手があったからまだいいのですが高野嬢など東研の人たちは似たような苦労をしたようです。途中で竜野へ電話を入れ、前日の曲を翌日へずらすことを頼んだりしながら宿舎へ着いたのはたしか夜の10時過ぎでした。日本の東西から、タツノヘタツノへ、とそれこそ涙ぐましい努力をしながら三々五々。執念というか気狂いというのか、芸の道で自分の役に穴をあけるのは大変なことなのでその責任感というのか、夜中まで苦労

話に花が咲いたことでした。

観世合同の景清、宝生合同の隅田川。舞囃子・熊野（望月）、拍子をあしらった船弁慶。いつものことながら防府・柳さんの舞、キリの全観世の番囃子・小督は圧巻でした。

宿舎の予約については、会社の得意先「ひがしまる醤油（株）」の専務などの口添えにより、実に六カ月以上も前に仮予約ができた」そうです。（磯部さんの便り）。

社内報への投稿については、7回あたりから一度も欠かしたことがなく、打上会の席上で安島幹事から一事業場へご下命があり、「承り畏つて候」と神妙に決まります。余り辞退することもないのは、連帯感溢れたうとう会ならではの現象であります。

しょう。

かかりについては、会社補助四八〇、〇〇〇円、会場予約料などを含め徴収分三七六、七〇〇円、計八五六、七〇〇円。従って一人当り自己負担の足代（片道） プラス四、九〇〇円程度かと思っています。全経費の約半分を補助された会社（厚生課）に感謝する次第です。

今回は台風というアクシデントにもめげず、一過快晴の播磨平野に謡声を響かせ、皆さん満足して引上げたことでした。

故中島義照さんを追善し、全観世で「江口」を謡ったことを思い出します。（52ページ参照）

第19回うとう会（昭55・11・1・2）

静岡・袋井 可睡斎

今回の開催地は再び静岡へ回帰、高橋さんのおられない富士としては岡田さんの出番となって事が運ばれました。可睡斎という寺は東海道屈指の禅（曹洞宗）の大道場で六〇〇年の古刹。かつて幼ない家康とその父を戦乱の巷から救ったことがあります。

その恩儀に対し家康は一〇万石の待遇を与えました。一〇万坪の境内、林間の諸堂など、その偉構と美庭に感じ、謡そっちのけで堪能している人もありました。寝所に当てられた各部屋の襖や天井の絵の立派なこと、会場となった瑞竜閣の一七〇畳の大

広間、とくにうすさま安置の東司（お手洗）など、記憶も新しいことと思います。もちろん有志は、朝の勤行に参加しました。

演奏では、富士（宝）の大曲・朝長、全観の昭君。平尾さんの一管・楽、近藤さんの独鼓（太）。居囃子一番。それに、命尾先生を中心として例年三島大社で催されている師作の舞囃子・木犀（望月）。筆者の舞囃子・実盛をキリに全曲目をめてたく謡い納めました。

宴会のあとで、幹部と若手のふたつの座談会を行い、20回記念出版への準備をしたことも印象に残ります。この数年、うとう会の会計の幅も八〇万円を超え、いよいよ「大会」の様相を続けております。本年は、

八一、七〇〇円のうち会社補助三九〇、〇〇〇円、徴収分四二一、七〇〇円、84名ですから足代以外各人約五、〇〇〇円ということになります。

帰路の新幹線の乱れ、日本シリーズ「近鉄」の敗戦など面白くない向きもあったかと思いますが、宿泊・会場係の富士組、番組係の山家さん（四日市）、司会の安島・鍛冶さんなどの活動に支えられ、何よりも会場のすばらしさによって、すべてよし、の第19回でした。

（注）記念の第20回を前にして、会計幹事の安島さん、実に十二万円という繰越しを作って準備しています。（54ページ参照）

おわりに

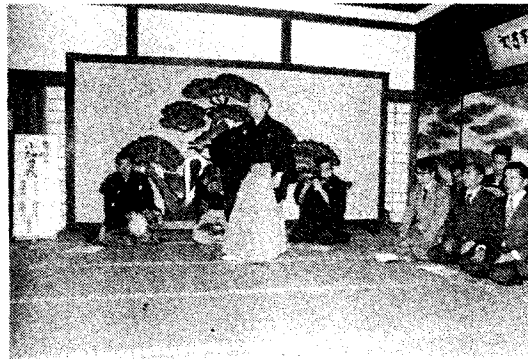
「協和うとう会・20年の足跡」もようやくのことで、「了」に漕ぎつきました。なるべく短くと思って努力したつもりですが、かなりの枚数になってしまいました。鬼の安島、に半分ぐらいは切られるのではないかと恐れています。

「失礼な、俺のことが書いてない

……」とのお叱りも沢山受けそうですが、紙面の関係でお許しのほどを……。このあと、今まで衝に当たってこられた新旧の幹部に、筆者の忘れていたトピックスや記憶違いなどを教えていただき補筆するつもりです。20回の記念大会を迎えるに当たり、東京の本舞台を借りて本格的に祝い



△第13回（49年・浜松館山寺荘）



▽第16回（52年・三井寺法泉院）

たいという案もありましたが、たとえ演奏には不便であっても、当社の発祥地・東北沢に新築成った研修所でも、加藤会長はじめ会社幹部の方々にも臨席願って開催するのがふさわしい、という結論になりました。

記念会誌の発行も、すでに多数の会員の寄稿を得て準備が進んでいるようで、拙稿が律速因子になっているんじゃないかと危惧しています。

このほか、うとう会に関連の家族にも参加を呼びかけ、記念植樹もしよう……など、幹事の方でいろいろ趣向が練られているようです。

それでは皆様、20回の記念大会でお会いしましょう。

終りに、怪しげな筆者の記憶を補完していただいた新井会長はじめ皆様に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

「協和うとう会」は、ベテランのOBより昨日入門したような現役の若い人にわたり、日本列島の各地に散る事業場を結び、協和醗酵の縦横に広がる、謡を通じて大きな連帯の場であります。20年をかけて皆が築いてきたこの会が、今後ますます発展するよう心から祈念して筆をおきます。

（56・5・31）

いやさか
弥栄

〔 付 表 〕 協和うとう会の足跡

（参加人員）

（本・東・富） 観宝合同謡会	（第1回に相当） 35・7・17	健保・熱海荘	21人
同上合同謡会	（第2回に相当） 36・8・20	修善寺・あさば旅館	17
第3回うとう会	37・6・17	健保・熱海荘	25
第4回 "	38・6・23	健保・熱海荘	25
第5回 "	40・10・31	健保・熱海荘	35
第6回 "	41・11・20	熱海つるやホテル	39
第7回 "	43・10・20	四日市倉庫湯の山保養所	28
第8回 "	44・11・16	協和・網代荘	35
第9回 "	45・10・18	三島・佐野別邸	50
第10回 "	46・10・24	浜松・西遠荘	60
第11回 "	47・9・17	三島玉沢・妙法華寺	72
第12回 "	48・9・15～16	浜松在・奥山半僧坊	64
第13回 "	49・10・19～20	浜松市・館山寺荘	74
第14回 "	50・10・18～19	大阪吹田・山手会館	84
第15回 "	51・11・6～7	湯の山・希望荘	90
第16回 "	52・11・5～6	三井寺・法泉院	87
第17回 "	53・11・4～5	湯の山・希望荘	81
第18回 "	54・10・20～21	竜野市・赤とんぼ荘	77
第19回 "	55・11・1～2	静岡・袋井・可睡斎	84